
彼岸色の世界

あかい はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸色の世界

【Nコード】

N6376Y

【作者名】

あかいはな

【あらすじ】

その人はいつも、いつも。

赤い花が咲いている。

裂いている、心を体をその血の巡りを。

手触りは、過程は味。

華やかな色が、赤で赤。

そんな、日記もとい手記。

『生来、私は彼岸花というものを愛していた。

それがどういう理由だったのか、突き止めるのには自分の人生の半分より多くを費やすことになった。

そうなのだが、それはそれで大いに幸いであつたと私は思っている。

□

それは、こんな件で始められる。

まえがき（前書き）

とある人の日記です。

その人は当然ながら実在しません。悪しからず。

と言うか、とあるキャラの内面を微妙に改造した上で解釈し直した
というか。

全く描写されていない部分を勝手に加えてありますが、それはそう
いうものだと思って頂ければ。

まえがき

序文で書いたはずだが、私は彼岸花を愛している。それは物愛ではない。愛でる、という生き物を憐れむ感情では決して無かった。

かと言って、それに見出した空想の人格に友愛を抱いたのか、と聞かれるとそれも否と答えたい。

誤解と忌憚を恐れず言ってしまうば、それは親愛であつた。自己愛でもあつたし、性愛でもあつた。私は彼岸花に恋の感情を募らせていた。

しかしながら一方で、何かの代用品として愛欲の対象となっているのではないか、と考えたこともある。

何故、惹かれるのか。それは人が人に恋をする理由と同じであり、生まれた頃は答えに遠く届かなかった。

それは今の今まで考えて漸く解つたものであり、今この部分で書いてしまうには余りに突飛すぎる。なので後述したい。

●

一 ページ目

わたしとは

さて、ここで私の生い立ちについて語っておくべきであるはずだろう。

私は京都のとある一家に生まれた。

少々古い家柄であり、代々剣術を修めることを不文律としてきた家である。

姓について書くのは正直、私としては避けたい。何より私がそういったものを嫌っているからであり、私自身名乗るときは姓を省く。話がずれてしまった。あまり好き勝手に書くのも、改めて誰彼が読む時に目安くない。

決まりごとの通り、私もまた剣術を学んだ。

物心ついたときには彼岸花と共に有り、次に剣があった。そしてその傍らに華道があり、更には料理があった。

物語の登場人物が何かのような多才ぶりではあるが、それも全て彼岸花を愛する理由に通ずるものであった。

つまり、これらの特技とは愛の賜物である。愛とは偉大だ。

続けよう。

私の表見くらいはこの程度で理解してもらえと思う。ここからは彼岸花の話だ。徹頭徹尾彼岸花について書かれていくことになる。

誰が読むかは知らないが、その辺りは堪忍して頂きたいと思う。

彼岸花。そう、彼岸花だ。私がそれと出会ったのは生まれてすぐだ。物心付く前だ。私すら知らぬ所ではあるのだが、その頃から花を好んだらしい。その中でもとりわけ……、つまりはそう言うことだ。そして、それ程なのであるとも分かんと思う。子供なのだから物に恋をすることもあって可笑しくはないだろう。私は普通なのだ、と思われた。しかし、いけなかった。彼岸花なのが、少々いけなかつ

たらしい。

●

二ページ目

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6376y/>

彼岸色の世界

2011年11月19日14時47分発行